12月度関西支部運営部会と 機器運営委員会の活動

12月度関西支部運営部会

関西支部運営部会(部会長:シャープ(株)長谷川 祥 典 取締役専務)では、12月7日(水)に開催した12月度 の部会に日本アイ・ビー・エム(株)の下野雅承 最高顧問 (前 取締役副社長執行役員)をお招きし、「IT産業の変 化とIBMの変遷 I のタイトルで講演をいただきました。 IBMは1911年にトーマス・J・ワトソンにより設立され、 今年で105年目を迎えます。38年前に下野氏が入社さ れた当時は、メインフレームで圧倒的な地位を占めてい ました。PCではアップルに遅れを取りましたが、CPU をインテル、OSをマイクロソフトから調達して81年に 「IBM PC | をリリース、後の 「ThinkPad | で地位を築き ます。90年代に入ってメインフレームは時代遅れの遺 物となり、PCのコモディティ化も進み、また、95年以 降はインターネットが爆発的に進化しました。これに伴 い、IBMの事業も製品からソリューション/サービスに 重心を移して行きます。

従来のIT事業は「SoR (System of Record:定型業務の最適化)」が中心でしたが、デジタル化の進展により、企業と個人 (B2C)、仲間と仲間 (P2P: Peer to Peer)を結ぶ「SoE (System of Engagement:協働のための情報活用)」に向け、イノベーションが加速し、Google、Amazon、Facebook、Zwitterといった「プラットフォーマー」の存在感が急速に高まっています。その中でIBMは、21世紀のITを支える5つのプラットフォーム「CAMSS」(クラウド、アナリティック、モバイル、ソーシャル、セキュリティ)でM&Aを進め、足場を固めている所です。経営も、「製品」中心の時代は地域・国別に進めていましたが、ソリューション/サービスが主流となるに従い、事業別 (ハード/ソフト/コンサル

ティング系/インフラ系)の管理へと改革を進めました。 グローバルに共通の財務ルールを定め、マーケティング の枠組みも1つにまとめました。世界で300ヶ所あった 購買拠点を3ヶ所に集約、各地で現地化されていた人事 システムも標準化し、グローバルに計画を立てて進めて います。

コンピューターの能力向上により、構造を持たない大量のデータを処理して構造化し、理解・推論を経て学習する「コグニティブ」システムが現実のものとなって来ました。IBMが4年をかけて開発した「Watson」は11年に米国の著名なクイズ番組でチャンピオンに勝利し、注目を集めました。その後、多言語化と、クラウドを活用したサービスの拡大を進め、急速に用途が広がりつつあります。コールセンターでの電話応対から、保険金の支払い審査、がん治療法の選択、チャットを通じて客の好みを探り「モノ」より「コト」を売る顧客対応等が実現し、今後、一層の拡大が期待される所です。

長年にわたる経営中枢でのご経験を踏まえ、大変わかり易く、示唆に富んだお話しをいただきました。今回は、特別に正副支部長、機器・部品両運営委員会の皆様にもご案内し、「拡大運営部会」として開催した所、長榮副支部長はじめ多くの幹部の方々にご参加いただきました。終了後の懇親会でも多彩な話題に話が弾み、有意義な時間となりました。



12月関西支部運営部会

機器運営委員会の活動(10月度、12月度)

機器運営委員会(委員長:シャープ(株)中野吉朗 副本部長)は、関西地区の機器メーカー4社(シャープ、パナソニック、富士通テン、三菱電機)の役員クラスにより構成され、年4回(7、10、12、2月)開催しています。

10月19日(水)の委員会では、ヤンマー(株)アグリ事業本部・農業研究センターの伊勢村 浩司 部長をお招きし、「進化する農業ICTの方向性〜M2MからIoTへ〜」の演題で講演をいただきました。輸入自由化や、人手不足・高齢化に対応する生産性向上というわが国農業の課題に対し、同センターでは「機械技術+ICT技術+栽培技術」の融合によるソリューション「スマート農業」の開発に取り組んでいます。本年10月に第7回ロボット大賞・農林水産大臣賞を受賞した「ロボットトラクターの研究開発」をはじめ、取り組みの内容を詳細に紹介いただきました。従来の「アナログ+経験+感覚」に基づく農業を、多様な情報(ドローン映像、センサー情報、農機稼働情報、人手による作業の情報)を解析して見える化します。このデータに基づき、ロボットトラクターを用いて無人・高効率で作業を進めることで、大幅な生産性向上が可能となります。

農業は、今後グローバルに需要の高まりが期待され、 エレクトロニクス企業の技術を活用する余地も大きいこ とから、今後の相互連携への言及を含めて活発な質疑が 行われました。

また、12月13日(火)の委員会では、アイテック阪急 阪神(株)の金子裕次 上席部長より、「阪急阪神グループ が取り組むIoT & AI」の演題で講演をいただきました。

同社は阪急阪神東宝グループに属するITソリューション 企業で、鉄道を中心に不動産、ホテル、旅行、エンターテ イメント等、多岐にわたる業態に向けシステムを開発して

います。近年は医療分野に進出したこともあり、グループ 外のビジネスが6割にのぼり、外部向けに開発したシステ ムを内部に展開するケースも増えました。鉄道会社を中核 とするグループとして「沿線の企業・住民に安心・安全・豊か な生活を提供する」ことをめざし、全国の交通カード通用 地域をターゲットに、企業、工場、家庭のソリューション 開拓を進めています。受注の多くは、メーカーの提案に基 づくシステム開発が占めますが、IoTのゲートウェイとな る機器を使った独自のソリューション創出にも積極的に取 り組んでいます。国家戦略特区法に基づき、大阪府で本年 4月より民泊事業が解禁されたことから、インターネット を経由して操作する「スマートロック」サービスを構築、民 泊のみならず、不動産の内覧、会議室の予約、駅・ビルの 鍵管理等に展開しています。伊丹市と長岡京市では、ICタ グ・ビーコンを用いた子供の登下校、高齢者の見守りサー ビスを官民協働で開発、既に稼働中です。ヘッドマウント ディスプレイによる作業支援や観光案内にも取り組んでい ます。東大発ベンチャーと提携し、スマートロックやウェ アラブル機器で得たログ/画像のビッグデータをディープ ラーニングで解析し、新たな事業創造につなげて行きたい と考えています。セキュリティ対応やシステム商談の開拓、 AI活用のUIカスタマイズなど、システムビジネスならでは の課題について、質疑応答も含めて活発なディスカッショ ンが交わされ、10月度ともども有意義な会合となりました。



12月度機器運営委員会





出展者数

実施報告書 www.ceatec.com

CEATEC JAPAN 運営事務局 ・般社団法人日本エレクトロニクスショー協会)

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービル5階 TEL: 03-6212-5233 FAX: 03-6212-522 E-mail: contact2017@ceatec.com